

## グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』（翻訳：第一章～第四章）

フェリッペ・モッタ／岐部雅之（共訳）

### 解題

グラシリアノ・ハーモス (Graciliano Ramos: 1892-1953) は二十世紀のブラジル文学における最も重要な作家の一人に位置付けられ、一九三〇年代に活躍した北東部地方主義 (Regionalismo Nordeste) 作家としても有名である。その作品は写実主義と自然主義の影響を受け、ブラジル社会に対する批判的で悲観的な作者の視点が色濃く反映している。作家活動に専念する前はジャーナリストや教育監査官としての経歴を持つが、それらの経験が作風に及ぼした影響は興味深い。グラシリアノ・ハーモスの作品ではノルデステ（北東部地方）の風土と人々を取り上げるものが多く、それは人間の条件や社会問題に対する彼の関心を示しており、ブラジル文学における永続的な遺産となっている。

その作品は、短篇集や回想録のほか一九三三年に発表された初めての長篇小説『カエテス (Caetés)』を含め、一九三四年の『サンベルナルド (S. Bernardo)』、一九三六年の『苦惱 (Angústia)』、そして一九三八年の『乾いた人びと (Vidas Secas)』(高橋都彦訳、水

声社、二〇二二年) などがある。特に『乾いた人びと』は移住者の生活を鋭く、リアルに描いており、干ばつ、貧困、人間同士の搾取といったテーマを掘り下げている。

『カエテス』から『苦惱』まで、グラシリアノは一人称の語り手を立てている。人間の心理をめぐる洞察と内なる葛藤の鋭い観察は簡素な文体をもって綴られて行く。グラシリアノは装飾のない文体が有名だが、それはアーティザンとしての作家が趣向を凝らしている結果である。とはいえ、余計な単語を徹底的に排除し、読者に直接に訴えるグラシリアノの文体はそう単純ではない。

それを何よりも証明しているのは『サンベルナルド』である。管見の限り、この著作の日本語訳は部分的にもまだないが、刊行当初から評価が高く、ドイツ語や英語をはじめ多くの言語に翻訳されてきた。『乾いた人びと』が代表作であることは誰しも認めるところであるが、『サンベルナルド』こそ作家の最高傑作だと思える文学研究者や批評家も少なくない。実に、長年サンパウロ大学で教鞭をとった文芸批評家アントニオ・カンディド (Antônio Candido: 1918-2017) もそうである。

この小説の題名になっているサンベルナルドは北東部アラゴアス州にある架空の農園で、物語の舞台である。第一章の冒頭は「この自伝に取り掛かるにあたって、さしあたり作業分担から始めてみようと考えた」となっており、語り手のパウロ・オノーリオは自分が辿った半生を振り返り、それを自伝という形として刊行する意図が宣言されている。仲間の協力を得て実行しようとした計画が頓挫し、結局は本人が一人で書くことになる。この小説の残りはパウロ・オノーリオの回想、そして自分の物語を言語化しようとする闘いの記録である。内省的な営為であり、告白文学の一種とも言えよう。

なぜパウロ・オノーリオが自伝を書くのか、または書かなければならないかは文学研究者が長きにわたり議論してきた問題である。小説が展開されるにつれ読者もそれについて考えさせられるに違いない。最終的な解答が不明であっても、その根底にサンベルナルド農園、そしてパウロ・オノーリオがいかにそれを手に入れたかという背景があろう。今回訳出した第一章から第四章までにその過程が記されている。

一定の財を成したパウロ・オノーリオは、自分がかつて日雇い労働者として働いたサンベルナルド農園を手に入れる野心を持つ。そのため、サンベルナルドの若い農園主パジーリヤに近づく。孤児で成り上がりのパウロ・オノーリオと、凋落した道楽者のパジーリヤの対照が鮮やかである。それが最も如実に表れるのは巻煙草の件である。「そんな面して」二〇コントという大金をいかにも気軽に頼むパジーリヤにパウロ・オノーリオは「金は金だ」と一喝する。彼

の本性が垣間見える瞬間でもある。

パウロ・オノーリオがパジーリヤに農業の夢を仕込み、借金を背負わせた末に、サンベルナルド農園を乗っ取る。パジーリヤに接近した時からそう目論んでいたのかもしれない。ただし、パウロ・オノーリオを単なる悪質な詐欺師として決めつけるのは早計であろう。パジーリヤは生産手段である土地を持っているが、農業に見向きもせず農園が朽ち果ててゆく。その一方、パウロ・オノーリオはサンベルナルド農園の持つ可能性を理解している。農園の立て直しこそが最終目標なのだ。それを見事に表しているのは第四章の最後の、冷酷にまで感じられる業務的な二文である。「借金、利子、家の値段を差し引いて、七コント五百五十ミルレイスを手渡した。良心の呵責はなかった」。初め八十コントを要求されたパウロ・オノーリオは、結局わずか七コント余りをパジーリヤに譲ることで交渉をまとめたのである。

これでパウロ・オノーリオはサンベルナルド農園を手に入れる。物語の前舞台に立ち会った読者は彼の心理を知った上で、読み進むことになる。

なお、底本として本国ブラジルで定評のあるRAMOS, Graciliano S. *Bernardo José Olympio*, 1953を用いた。(解題おわり)

## 第一章

この自伝に取り掛かるにあたって、さしあたり作業分担から始めてみようと考えた。

友人たちに声をかけたところ、大方は国民文学の発展のために寄与することを快く受け止めてくれた。シルヴェストレ神父には道徳に関する事柄とラテン語の引用を任せる。ジョアン・ノゲイラは句読点、綴り、文の構造の担当である。アルキメデスには植字を頼んだ。それから文体面では、『クルゼイロ』紙の編集者で社主のルシオ・ゴメス・デ・アゼヴェード・ゴンジンに依頼した。私は構想を練り、本の中に農業と牧畜のさわりを盛り込み、諸経費を払って、表紙に名を飾ろう。

協力者たちと話し合って、やる気に満ちた一週間を過ごした。でき上った書物を思い浮かべ、千部以上も売れる夢を膨らませた。それも、コスタ・ブリットが死んでから経営に苦しむ『ガゼッタ』に金を握らせて書かせるつもり的美辞麗句ゆえんだ。ところが、事はそう容易に運ばないことに気づき、その楽観主義にも水が差された。ジョアン・ノゲイラは、倒置を利かせるカモンイスの言語で書かれた小説を望んだ。呆れたものである。

シルヴェストレ神父には冷ややかに出迎えられた。十月革命のあとに野獣になって、赤い襟巻を身に着けなかった者たちへの徹底的な調査と処罰を要求している。かつての友に、無下にされてしまった。愛国者なのだ。各々こだわりがあるのだから、それもこ

もつとも。

神父を協力者から外すと、ルシオ・ゴメス・デ・アゼヴェード・ゴンジンに望みをかけた。彼は素直な記者で、言われたとおりに記事を書く。

数日間、私たちは作業に取り組んだ。夕方になるといつも、アゼヴェード・ゴンジンは編集室をアルキメデスに任せ、小銭や銀貨を保管している引き出しに鍵をかける。それから、近ごろカジミール・ロベスが二、三人の男と舗装している道路を三十分かけて自転車で来ると、サンベルナルドに到着する。新聞報道を話題に出したり、政府批判を展開したり、マリア・ダス・ドレスが持って来るコニャックを飲んだりする。やがて必要に駆られつつ、へりくだって命令する。

「始めるとしますか」

ベランダへ出ると、籐椅子に深く腰を下ろして煙草を吸いながら原稿を整える。すぐ下の牧草地で草を食む赤茶色の毛の牛や、向こうの森の手前にある木挽き台の赤い屋根に目を遣る。

当初はなにもかも順調に進み、私たちの間に何ら衝突はなかった。雑談は長かったものの、各々が自分の言葉にこだわり、他人の言うことには耳を貸さなかったのである。自分とはいえば、物語に没頭して興奮が冷めず、ゴンジンの存在を忘れてしまうこともあった。沸々と煮えたぎる私の頭の中をごちゃごちゃさせる紙切れだと思なしたのだ。

結果は散々なものになった。初めの打ち合わせから十五日後、

『クルゼイロ』紙の編集者がタイプした二章分の原稿を見せに来たが、酷すぎて苛ついたのである。

「バカ野郎、ゴンジン。台無しじゃないか。生意気で、厚かましくて、自惚れやがって。そんな風にしゃべる人間がどこにいるんだ」

アゼヴェード・ゴンジンから笑みが消え、唾をぐくりと飲み込んだ。わずかな自尊心の欠片を集めると、芸術家は話し言葉を綴るなんてできないと、むっとして言い返した。

「できないだつて？」 呆気に取られて訊ねる。「どうして？」

できないものではないと、アゼヴェード・ゴンジンが答える。「こうやってきたんですよ、文学っていうのは。ね、パウロさん。

議論し合つて、ぶつかつて、もちろん妥協もしますけど、インクを使って言葉を並べるのはまた別でしょう。もし自分が話すように書いたら、誰も読んでくれませんか」

私は立ち上がって手すりに寄りかかり、マルシアーノが畜舎に連れて行くリムジン種の雄牛を近くで見ようとした。セミが鳴き出した。せむしのマルガリーダ婆さんが池の堤防を通つてやつて来た。教会の塔にいる梟が鳴いた。ぶるつと震えて、私はマダレーナのことを思った。それから、パイプに煙草の葉を詰めた。

「ゴンジンの馬鹿野郎が。もうお手上げだな。ひと月で三度もだめだとは。コニヤックでも飲んでいろ」

## 第二章

私はこの計画からいったん身を引いたが、あるとき梟が鳴くのを見て、やはり再開することにした。直接的あるいは間接的に得があるか否かは考えずに、自分の力で乗り切ってみるとしよう。

結局のところ、シルヴェストレ神父やジョン・ノゲイラ、ゴンジンの協力を得なくて良かった。面と向かつては誰にも明かさない事実だつてある。作品は筆名で出版されるわけだから、私は今から事実を語ろうと思う。それで、作者が私だと知られたら、嘘つき呼ばわりされるのは避けられまい。

先を続けよう。自分の物語を綴る。至難の業だな。役に立つものだとしても、二次的で不必要なものと決め込んで触れないかもしれない。それに、田舎者ばかり扱ってきたので、読者の理解力を十分に信頼しなかつたり、文章を意味もなく繰り返したりすることもあろう。おまけに、お分かりのことかと思うが、順序立てて進めるといふのは一切ない。どうでも良いことだ。サンベルナルドで働かせている奴らに言わせれば、いずれの道を通つても町の呑み屋にぶち当たる、と。

食卓につき、パイプ煙草をふかしたり、コーヒーを飲んだり、気だるい作業を中断したりしながら、夜が黒く染めるオレンジの木の下に目を遣り、この万年筆はなんだか重いな、と独り言ちる。考えることに慣れていないのだ。立ち上がって、畑に面した窓のそばに寄る。カジミーロ・ロペスになにかいらないかと訊かれる。

「なにも」

彼は隅に腰を下ろす。私はまた座って、自分のくだらない文章を  
読み直す。

ほら、ご覧のとおり。私がマダレーナの受けた教育の半分もあれ  
ば、それこそ遊び半分でできただろうに。あの紙の山に価値があつ  
たのだと、ようやく気づくのである。

私は統計学、牧畜業、農業、簿記に精通しているが、それは間違  
いなく文学というジャンルには無駄な知識だ。これに頼ると、読者  
に疎い専門用語をうっかり使ってしまうと、学者気取りと思われか  
ねない。そうした分野以外は、私の無知は文句ないものとなる。当  
然ながら、五十歳にもなって、若かりし頃に吸収しなかった知識を  
身につけるつもりはない。

吸収しなかったのは興味をそそられず、異なる方向へと進んだか  
らである。この人生で私が成し遂げたかったのは、サンベルナルド  
の土地を手に入れ、この家を建て、綿花とトウゴマを育て、木挽き  
台と綿繰り機を置き、この森で果樹園と養鶏場を始め、適当な牛の  
群れを手に入れることだった。すべてが終わってこうして数行にま  
とめると、これら全部は造作のないことだが、これから始めようと  
する者にとって、周囲を見まわして絶えるものがなければ、その困難  
は想像するに難くない。シルヴェストレ神父の入れ知恵で作った礼  
拝堂もある。

こうした作業に追われてしまい、ジョアン・ノゲイラの持つ学識  
やゴンジンの愚行には及ばなかった。だから、私の物語を読む人た

ちは文学的な言葉遣いに書き換えたいくなるかもしれない。たとえそ  
うはならなくても、損をすることはない。作家を装うつもりはない  
し、職を変えるには手遅れだ。目の前で泣いている息子に必要なの  
は、手を差し伸べて、豊かに生きるためのルールを教えてくださいる人  
である。

「それじゃあ、なんのために書くの？」

「知るかよ！」

残念なことだが、もう何枚も紙を無駄にしてしまったのに、まだ  
始まってもない。

「マリア・ダス・ドレス、コーヒーのお代わりを」

無駄になったこの二章。ゴンジンが書いた原稿の粗を落とせば、  
使えなくはないかもな。

### 第三章

まず言っておきたいのは、私の名はパウロ・オノリーオで、体重  
は八十九キロ、聖ペドロの日の頃に五十歳を迎えたことだ。年齢、  
体重、白髪交じりの太い眉、髭だらけのこの赤ら顔が威厳をもたら  
してきた。それらが無い頃は、今ほどでもなかった。

率直に言って、年齢の、この疑いのような数字と聖ペドロの日  
付は儀礼的なものである。私がこれを受け入れるのも、教区の洗礼  
記録簿に記載されているからだ。代父母の名前がある出生証明書を  
持っているが、そこには父親の名前も母親も名前もない。両親には

なにか知られたくない理由があったのだろう。そんなわけで、自分の誕生日を正確に祝うことができない。ともかく、誤差があったにしても大したことはなく、前後ひと月くらいのものだ。そんなことはどうでもいい。ほかの重要な出来事だって、そこら中にある。

ということ、私は一家の創始者である。それは幾らか失望させられるものだったが、他方で貧しい親戚を養う面倒から解放してくれた。その類の身内は恥知らずで、成功者の懐に潜り込もうとしやがる。

私の幼少期を読者諸君に語るとすれば、嘘をつかねばならない。なんの当てもなくふらふらと過ごしてきた。自分を叱っていた盲人と、菓子売っていたマルガリータさんのことを覚えている。その盲人は姿を消したが、マルガリータさんはサンベルナルドのこぢんまりとしたきれいな家に住み、誰も彼女の邪魔をしない。週に一万レイスかかるが、それは子ども時分にやってもらった恩の埋め合わせと言って差し支えない額だ。もう百歳だから、近いうちに棺を買ってあげて、礼拝堂の祭壇付近に埋葬させようかと思う。

十八歳になるまで鉄仕事ばかりしながら、十二時間働いて五トスタン稼いでいた。そんな折、自分にとって初めての武勇伝となる出来事があった。最後はお祭り騒ぎになった通夜の日、色気たっぷり薄黒い小娘のジェルマーナを捕まえて、その尻を思い切りつねってやるとバカ喜びしたんだ。しばらくすると、そっぽを向いてジョアン・ファグンデスと関係を持った。馬泥棒のために名前を変えた奴だよ。結果、私はジェルマーナをひっぱたき、ジョアン・

ファグンデスを刺した。それで、警察署長に逮捕され、鞭で打たれ女も抱けず、刑を食らった。三年九月十五日間も刑務所で暮らす羽目になったが、小さな聖書を持っていた靴屋のジョアキンさんに字を教わった。プロテストタントの聖書だったが。

靴職人のジョアキンは死に、ジェルマーナは身を持ち崩した。私が釈放されたとき、彼女は家に客を取る病氣持ちに成り果てていた。

その頃にはもう彼女のことはどうでもよく、金儲けのことを考えていた。選挙人証書を取得すると、高利貸しで政治リーダーのペレイラさんに、五パーセントの月利で百ミルレイスを貸してもらった。私はその百ミルレイスを返済し、月利三・五パーセントに引き下げて二百ミスレイスを手にした。そこから利息は下がらなかった。都合よく騙されないよう算数を学ぶことにした。

まるでタマ取りの獣かなにかのように（教養のない言い方だが）、ペレイラに搾り取られた。苛々させやがって、あの悪魔が。あとで敵討ちにしてやった。何もかも奪い取り、あいつを丸裸にした。もつとも、それはずいぶん先のことだが。

初めはいくら追いかけても資金に逃げられるばかりだった。息つく間もなく追いかけた。内陸を飛び回り、ハンモック、家畜、聖人の像、ロザリオ、小物を持って交渉しては、儲けと損を繰り返した。掛け売りをしたり、手形にサインをしたり、目の回りそうな複雑な取引もした。喉の渇きと空腹に苦しみ、干上がった川の上で寝て、声のうるさい人間と喧嘩をし、銃を構えて売り買いたこともあった。

例を一つ上げよう。サンパイオ氏は牛の群れを買ってくれたのだが、いざ支払いのときになると私を足蹴にして、すました顔をしていた。私はあちこち歩き回り、じたばたして、なんとかしようともがいた。それでも、サンパイオ氏は非情だった。あれは契約ではなかったのか、そんなことがあるのかと自分の不幸を嘆いた。大量の負債を抱えてしまったんだ。恥知らずのいかさま野郎で、地元で幅を利かせる大物に侮辱された。それでも、私は諦めずにカンカランコで数人の若い男を雇った。そして、サンパイオ氏が大農場へと向かっていった際、不意をついて襲撃した。こいつを縛り付けて、家畜用の茂みにぶち込み、サボテンやアザミゲシ、シケシケ、キツネノシツポの棘で体を傷めつけてやった。

「さあ、力があるのはどっちか教えてもらおうか。今からじつくりと絞ってやるからな」

ネズミにブリキ缶の穴の開け方を教えるような抜け目ないサンパイオ氏は、正義と宗教で揺さぶってきた。

「なにが正義だ。正義も宗教もない。お前さんにあるのは、三十分の六か月分の利子をつけてまっさらにするのだ。金を出すか、ゆっくり血を流すか」

サンパイオ氏は家族に短い手紙を認め、その日の内に三十六コント三百ミルレイスを手渡した。カジミール・ロペスが運び屋を担いだ。私は領収書を出して感謝し、別れを告げた。

「ありがとう。神の加護がありますように。手数をかけて申し訳ないな。それじゃあ。それと、もう正義なんて振りかざすんじゃないぞ。

そうでもしたら、狂犬になって噛み殺してやるからな」

あの辺りに顔を出すことは二度となかった。戻ったとしたら、撃ち殺されるのは間違いないしな。顔の皮を剥いで、太陽の下でふざけて笑っている姿を見つけられても分らないようにするはずだ。大きな鈴の中に入れていた財産も根こそぎ持っていけるだろう。紙切れで蓋をしたあと、馬の鞍に吊るして用心していたものだ。つまり、お金と紙切れが落ちたら、鈴が鳴る仕組みだよ。

しまいにあの放浪生活にうんざりして、田舎に戻った。きれいなナヴィオ川の水でさえ警戒するカジミール・ロペスがついて来てくれた。気に入っている。犬の嗅覚と犬の忠誠心を持つ勇敢なやつで、縄さばきが上手く、追跡もよくできるからな。

#### 第四章

故郷のアラゴアス州ヴィソーザ市に居を構えることにした私は、すぐさまサンベルナルド大農場を手に入れようと目論んだ。ここの畑仕事で五トスタンの報酬を得ていたことがある。

かつての主人サルスタアノ・パジーリヤは息子を学士にするべく馬鹿げた金の使い方をした末に、一家にとって待望の肩書を得られないまま胃病と空腹で死んでしまった。何気なしにパジーリヤの息子ルイスに会いに行くと、ビリヤード場でバカラをしながら泥酔していた。非難されてしかるべきとはいえ、賭博はれっきとした職業だが、酒を飲んで賭け事をする男に判断力などない。そばで三十分

も見てみると、ルイスは筋が悪く、間抜けなくらい騙されていることに気づいた。

彼と親しくなってから二か月で二コント・デ・レイスを貸したが、パン・セン・ミオ店でランプ遊び、タラ料理と火酒に溢れた粗野な女との宴にあっけなく使い果たした。こうした愚行を微笑ましく思っていたある日、また金のなくなったルイスが姿を見せ、農場でサン・ジョアン祭をしようと声をかけてきたので、もう五百ミルレイスを工面してやった。手形のことには気にしないふりをした。

「どうしてこんなものを。二人の間には……そんな他人行儀なことなんて」と言いながら、その手形をしまう。

大農場は荒れ果てていた。雑草が生い茂り、あちこち泥まみれで、ハネカクシが舞っていた。大邸宅の壁は崩れ、道はまともに通れないほどだった。それでも、素晴らしい土地だ。

夜になると、黒人たちがお祭り騒ぎで陽気にサンバを踊り、部屋中の埃を舞い上がらせる中、大太鼓と横笛が国家を演奏していた。その間、パジーリヤは農場の女たちとカンジカ料理の鍋を囲んで、クレオメに覆われた中庭をあちこち歩き回っていた。私は楽しんでるところを遮って訊ねた。

「どうしてサンベルナルドで畑をしないんだ？」

「なんですって？」煙のせいで目をこすりながらパジーリヤが訊き返す。火の熱で萎れたパイヤの木にもたれ掛かっていた。

「牽引車や鋤があればまともな農業ができるのに、考えたこともないのか。うまくやれば、どれほど儲けが出ると思う？」

農場主には嘆かわしいほどの無知をさらけ出したルイス・パジーリヤは、手で追い払う仕事をし、大した関心を見せずに女たちのいる輪に戻って行った。ところが、夜明け前になると泥酔して訳の分からないことをぶつぶつ言いながら絡んできた。町へ向かう牛車が揺れるたびに、パジーリヤが顔を上げる。

「おめでたいですよ、パウロさん。とんでもないことになりますって」

荷物を支える棒につかまって嘔吐しだした。それから眠りについてたが、苦しそうに目を覚ましておくびを出す。

「鋤ですって。鋤に勝るものなんてありませんよ」

翌日、パジーリヤが現れたが、まだ酔いが残っているようだった。「パウロ・オノーリオさん、ご相談があります。ずいぶんお詳しいようで……」

「まあ」

「農場で畑をすることにしたのはお伝えしましたかと」

「だいたいな」

「そうすることにしたんです。ただ、今のままではどうにも。収穫は十分ですが、今よりもっとできるかもしれません。鋤があれば……。そう思いませんか。前から考えているのは、キャッサバを栽培して、製粉場を作って、それも最新式の。どうでしょうか」

愚かなことを。こんなに肥沃な土地をキャッサバ栽培で駄目にするとは！

「いいだろう」



それから耳を傾けず、パジーリヤをそのまま喜ばせておいた。夜にはギターの音色が響くグルガネマで計画を立ててに行かせることにした。パジーリヤはすっかり別人になった。パライーバ川の石の上で火酒の瓶を手に持ち、種や化学肥料について大仰に語りながら飲み仲間たちをうんざりさせていた。妙な自信をつけてくると、農学を学びたいと思うようになった。間もなく、作物栽培や農機具、製粉場が町中に知れ渡ったのである。

「農業はどうだい、パジーリヤ」

初めは訊かれたら答えていたものの、そのうち冷やかされていることに気づくと、仲間たちの裏切りに思い悩んで避けるようになった。

「くそつたれども」バカラをやりながら愚痴る。「やるしかないな」

身ぐるみを剥がそうとしていた賭け仲間のことを言っているのか、揶揄されていた飲み仲間のことを言っているのか、周囲の人たちにははっきりしなかった。パジーリヤが私に打ち明けてくれた。

「クズ野郎が。見てのとおりすごい計画だつていうのに、馬鹿どもがケチをつけてくる。どいつもこいつも分かっていますよ、パウロさん。ここは不幸な土地ですつて。無恥なことやくだらないことばかり」

当初の決意が揺らぎ苦々しい表情のまま、ペレイラから借金しようとしたことを明かした。

「馬鹿ですよ。この計画がいかに立派なものか詳しく教えてあげたのに。それを信じず、金がないなんて言いやがって。面白い話だと

思ったのに。それで、二十コントほど出す気はありませんか」

薄い唇で汚い歯を見せている苦笑いの小男を笑顔で見つめた。

「おい、パジーリヤ」にやりとする。「ところで自分で煙草を巻いたことは？」

パジーリヤはふだんから既製の煙草を買っていた。

「それが楽なのは分かるが、高くつく。だからな、パジーリヤ。自分で煙草を巻いたら、千本巻くのがどれほど大変か分かったはずだ。それじゃあ、一本を巻くよりも十トスタン稼ぐのがいかに難しいか考えてみてくれ。一コント・デ・レイスつてことは、十トスタン紙幣が千枚。二十コント・デ・レイスは、十トスタン紙幣が二万枚。お前にはそれが分かっていないようだな。そんな面して二十コントの話をしていると、金が汚れた紙切れみたいだ。金は金だ」

パジーリヤは俯き、計算くらいできると膨れてぶつぶつ呟いた。出たり入ったりを執拗に繰り返す。

「私が資産家だとしても言うのか？ 財産を根こそぎ持って行きたいとでも？」

パジーリヤは不機嫌になりながらも、サンベルナルドの担保を申し出した。

「なに言ってやがる。サンベルナルドなんて吹けば飛ぶようなものだ。ペレイラの言うとおりで。お前の親父が農場を駄目にしたんだ」

そうして、うやむやに「分かった。考えて見よう」と約束し、翌日も変わらず「さあ、どうなるかな。金は金だよ、パジーリヤ」と

言った。

私はこのお遊びに一週間かけ、メンドンサ氏の年齢や健康面や財産についての情報収集をした。決心すると、良識ある人たちに狂っていると思われてしまった。

パジーリヤは二十コントを受け取ると(すでにあった借金と利子を差し引く)、印刷機を買い入れ、独立系の政治機関紙『コレイオ・デ・ヴィソーザ』を創刊したが、わずか四部で廃刊すると、『文芸娯楽クラブ』に取って代わられた。アゼヴェード・ゴンジンが規約を作ったあと、パジーリヤは総会の第一部会で功労会員と終身名誉会長に任命された。

農業はというと、ルイス・パジーリヤは怯んだ。農機具の目録を待っていたが、それすら届くことはなかった。私を避けるようになった。顔を合わせようものなら、肩をすくめながら気づかないふりをして帽子を目深に被った。手形の期限が初めてきたとき病気になるというので、見舞いに行ったところ、食堂に隠れてジョアン・ノゲイラとバックギャモンに興じていた。こちらに気づくと、慌てふためいた。齧られた爪の、干からびて細い手の中でさいころがカラカラと鳴っていた。

そして、姿を消した。聞くところによると、サンベルナルド方面へ逃げたとのことだった。

「あっちで何をしているんだ？」

最後の手形が期限を迎えたのは、ある冬の日のことだった。どうしようもないほどのどしゃぶりの雨が降っていた。早朝、カジミー

ロ・ロベスを呼んで馬に鞍をつけさせ、外套を羽織って出発した。四時間でニレグア。道のりはひたすら泥濘が続いた。遠くにメンドンサの農場の煙突と、サルスタアノ・パジーリヤといつも揉めていた土地一帯が目に入った。今では、ボンスセッソ農場の柵がサンベルナルドに食い込みつつあった。

私が向かった大邸宅は、大雨の中で一層古びて朽ち果てたように見えた。クレオメは刈り取られていなかった。馬から降りて中へ入る際、ぐっと力を込めて両足で地面を叩いて拍車を鳴らした。ルイス・パジーリヤは居間の薄汚れたハンモックで眠っていて、窓を打ち付ける雨や床を水浸しにする雨漏りにもお構いなしだった。私はハンモックの取っ手部分を揺らした。『コレイオ・デ・ヴィソーザ』の元編集長はゆっくりと体を起こした。

「やあ、お元氣そうで」

「まあ、おかげさまで」

腰掛けに座ってパジーリヤに手形を見せた。彼は不快感を露わにして視線をそらす。

「そのことはずっと考えていますね、ずっと。眠れないくらい。

昨日だって、顔を出して話し合おうと朝早くに起きたのに、こんな雨で行けなくて……」

「雨のことは横に置こうじゃないか」

「ほんとに大変なんですよ。今の利子と合わせて先延ばしをお願いします。ほかにはどうすることもできません」

「製粉場や鋤はどうした？」

「こんな冬だと何もかもうまく行きませんよ。今はどうにもできませんけど、約束は守りますから。先延ばしを……」ルイス・パジリーヤはしどろもどろに答える。

「無駄だ。清算しよう」

「清算だなんて。できないって言いませんでした？ 印刷機ならあるのですが」

「なにが印刷機だ。馬鹿なのか」

「それしかありませんって。みんな手持ちものでどうにかするしかないんですから。借金は否定しませんが、胸にナイフを突き立てて払えって言われましても。逆さまにされても、小銭一つ出てきませんよ。すっからかんなんです」

「それはだめだ、パジリーヤ。ほら、手形の期限は過ぎているだろう」

「だから、ないんですってば。盗みを働けども？ それはできません、もう終わりですから」

「終わりだって？ この恥知らずが。今から始まるんだ、この犬野郎。なにかもいただいで、素っ裸にしてやる」

『文芸娯楽クラブ』の終身名誉会長の顔が青ざめる。

「パウロさん、落ち着いてください。声を荒げたところでどうにもなりません。金は払うので、もう数日待ってください。借金はね、背負っている方が苦しいんですから」

「一時間たりとも待つ気はない。こっちが真面目に話しているのに、ふざけやがって。馬鹿な真似はするな。この件を穩便に片付けたい

なら、農場に値段をつける」

ルイス・パジリーヤは口をあんぐりと開けて、小さな目を見開いた。彼にとってサンベルナルドはまるで使えないものに成り果てていたものの、愛着があった。そこに貧乏という苦悩をひっそり抱えながら、小鳥を殺して、小川で泳ぎ、寝ていた。ずっと寝ていたのは、メンドンサに会うのを恐れていたからだ。

「値段をつけるんだ」

「ここだけの話、農場はずっと手元に置いておきたいと思っ

て」哀れなパジリーヤがぶつぶつ言う。  
「何のために？ サンベルナルドなんてゴミ屑じゃないか。友人として言っているんだぞ、そう、友人として。仲間が貧乏に喘ぐところなど見たくはない。弁護士の中には金に目が無いし、ノゲイラに脅させたらお前さんには何も残らないぞ。金ばかりかかる。パジリーヤ、値段をつけろ」

取引について話し合っていると夕暮れ時になった。手始めに、ルイス・パジリーヤは八十コントを要求した。

「気でも狂っているのか。お前の親父はフィデリスに五十コントで売ろうとしていたのに、それでも高い。それがもう農場は廃れ、近所の家畜が門を壊し、あばら家ばかり。メンドンサが飲み尽くそうってのに……」

息が切れたので呼吸をして、三十コントと告げた。パジリーヤが七十コントに下げたところで、私たちは話題を変えた。取引の話に戻ると、私は三十二コントに上げた。パジリーヤは六十五コントす

ると、神に誓ってこれが最後だと言い張った。こちらもそれ以上は出せないし、その価値もないと強い口調で返した。それでも、三十四コントならどうかと言う。パジーリヤは二人の付き合いに免じて六十コントでどうかと迫る。こうして二時間も堂々巡りをした挙句、ついで落としたところは見つけれなかった。

私は内陸への旅について話すことにした。その後、さりげなく三十四コントで粘ると、五十五コントになった。こちらは心の広さを見せて、三十五コントに上げる。パジーリヤは五十五コントから譲らなかったで、サルスチアーノが息子の学業に使った金は無駄だったなど罵声を浴びせた。しまいに、手を出すと脅した。彼は五十コントに下げる。私は四十コントに上げるが、身を削りすぎだと叫ぶ。ここでどちらも引くに引けなくなった。メンドンサがサンベルナルドを飲み込もうとしていること、役人の仲裁、査定、諸経費を盾にして迫る。怯えた哀れな男は四十八コントへ下げた。四十コントなんぞ、あり得ないと後悔した。パジーリヤは四十五コントにしへ下げたが、私は四十コントから動く気はなかった。痺れを切らす。

「そんな価値なんてない、こんな土地に」

借金を差し引いて、残りは手形で分割払いとしよう。パジーリヤは狂乱して泣き出すと、神にすがって開き直った。弁護士だろうが、裁判官だろうが、警察だろうが、悪魔だろうが、何でも来ればいい。全部持って行け。折り合えるわけがないだろう。法律がどうした！

「法律が気になるかって？ くそ野郎！」

手段ならあった。後ろを振り返ることは一切ない。手段ならあった。報道機関へと出向いて自らの権利を主張し、ふざけた行為を咎めることもできた。私は情けを装って、現金で支払う上に持ち家を手放すことにした。十コントにしよう。パジーリヤは家に七コント、サンベルナルドに四十三コントの値を付けた。私はさらに二コント分を自分側に動かす。サンベルナルドに四十二コント、家に八コントとした。そこから半時間、言い争いを続けた末に取引を終えた。

後悔させないよう私はパジーリヤを町へと連れて行き、夜通し見張った。翌朝早く、彼が罨にかかったので、証書に署名してもらった。借金、利子、家の値段を差し引いて、七コント五百五十ミルreisを手渡した。良心の呵責はなかった。

- BASTOS, Hermenegildo. *Os coronéis – de Mendonça a Paulo Honório: notas sobre tipicidade e realismo em S. Bernardo*. Revista do Instituto de Estudos Brasileiros, n. 60, 2015, pp. 18–33.
- BICALHO, Ana Maria. *Diálogos Interculturais: Graciliano Ramos tradutor/ traduzido*. Tese de pós-graduação (não publicada). Universidade Federal da Bahia, Instituto de Letras, Programa de Pós-Graduação em Letras e Linguística, 2010.
- BISPO, André Aparecido. *A ficção e a confissão de Paulo Honório: O significado da estrutura do romance S. Bernardo de Graciliano Ramos*. Trabalho de conclusão de curso (não publicado). Universidade de Brasília, Faculdade de Planaltina, Licenciatura em Educação do Campo, 2013.
- BOSI, Alfredo. *História concisa da literatura brasileira*. São Paulo: Cultrix, ed. 37, 2000.
- BULCÃO, Clóvis. *Pequena enciclopédia de personagens da literatura brasileira*. Rio de Janeiro: Elsevier, 2005.
- CÂNDIDO, Antônio. *Tese e antítese*. São Paulo: Companhia Editora Nacional, 1978.
- FILHO, Edmundo Juarez. *História e alegoria em São Bernardo de Graciliano Ramos*. Tese de mestrado (não publicada). Universidade de São Paulo, Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas, Departamento de Letras Clássicas e Vernáculas, 2006.
- FLAUZINO, Valler Donizete. *A escrita e a escritura em S. Bernardo, de Graciliano Ramos: a confluência das memórias e dos olhares*. Tese de mestrado (não publicada). Pontifícia Universidade Católica de São Paulo, 2012.
- LIMA, Marcos Hidemi de. *Marcas da ordem patriarcal em São Bernardo: o dilema do favor*. Revista Investigações: Teoria da Literatura, v.22 n.1, 2009, pp. 151–178.
- PEREIRA, Rogério Silva. *O intelectual em S. Bernardo, de Graciliano Ramos: agregar*. SCRIPTA, Belo Horizonte, v. 20, n. 39, pp. 234–260, 2016.

*S. Bernardo*, de Graciliano Ramos. Capítulos I a IV.

Felipe Motta e Masayuki Kibe

〈Sumário〉

Graciliano Ramos (1892–1953) é um dos maiores nomes da literatura brasileira, não somente do século XX, mas em sua totalidade. Sua obra descreve a cultura e sociedade do nordeste brasileiro, focando, sobretudo, nos conflitos decorrentes de injustiças sociais. Lançando mão de um estilo conciso, porém esmerado, Graciliano tece tramas que apresentam ao leitor tanto as peculiaridades da sociedade nordestina no início do século passado quanto uma riqueza de introspecção psicológica.

Autor traduzido internacionalmente, infelizmente há poucas traduções das obras de Graciliano para o japonês. Digna de nota é a publicação da tradução de talvez seu mais famoso romance, *Vidas Secas*, em 2022. Tal obra narra a trajetória de uma família de retirantes assolados pela seca. Em contraste com *Vidas Secas*, quarta obra do autor, *S. Bernardo*, seu segundo romance, é narrado em primeira pessoa, na forma da autobiografia do fazendeiro Paulo Honório.

Personagem minuciosamente desenhada pelo autor, Paulo Honório, órfão e pobre, no curso dos quatro primeiros capítulos do romance se apossa da decadente fazenda de São Bernardo. Os meios que possibilitam a ascensão social de Paulo Honório são o objeto da presente tradução. Esboça-se aqui o ante palco onde desenrolar-se-á a trama do romance.